

医報

Vol.17 2015.4

目

次

巻頭言	総合病院鹿児島生協病院副院長 黒葛原真一	1
臨床研究		
成人孤立性左室心筋緻密化障害6例の臨床像	馬渡耕史	2
人工呼吸器患者の苦痛緩和と向き合って	右田明日香	7
バンコマイシンのTDMについて2013年のまとめ	田上昭代	9
症例報告		
感染性腸炎に伴う熱性けいれんで発症したHHV-6による片側性脳症の一例	中村達郎	12
発熱と全身倦怠感を主訴に来院し、渡航歴と症状などからデング熱の診断に至った1例	吉留正次	16
著書・論文		
学校医による「いのちの始まりと終わり」の授業	西畠 信	19
胎児心疾患の診断から治療へ、そして家族を支える	西畠 信	27
胎児診断時代の血管輪：これまでと何が変わるか？	西畠 信	35
インフルエンザ	小松真成	38
学会発表・抄録		45
著書・論文一覧／講演・シンポジウムなど		54
臨床病理症例検討会（2013年4月～2014年3月）		56
投稿規定について・編集後記		219

巻頭言

鹿児島生協病院 内科
黒葛原真一



鹿児島市の中学校に進学のために我が家が転居したのは慈眼寺の岩下という地区でした。今から41年前、1974年のことです。自宅にほど近い小川では、夏にはまだ蛍を見ることができました。自宅の裏は山裾で、前を見ると田んぼの中に住宅が点在し、はるか向こうに桜島と大隅山稜を見渡すことができました。その田んぼの中に翌年2階建ての市民病院が立つことになります。当時自転車で界隈をうろうろし、眼には映っていたのですが、最初にその病院を認識したのは高校生の時に胃腸炎で受診した時でした。周囲の道路は依然舗装されておらず、私をおろして駐車場に車を停めに行った父は、ぬかるみにハンドルをとられて路肩に脱輪してしまい、事務の方にお世話になったようでした。その数年後に自分がこの病院では働く事になろうとは考えも及びませんでした。

入職して28年が過ぎました。2階建ての市民病院は6階建ての生協病院になり、ベッド数、診療科、職員数、利用いただく患者様の数、すべてが大きくなってきました。ひとえに先人たちが提供してきた医療介護サービスが地域の患者さん利用者様に受け入れていただいた結果だと考えています。

先日、外来で早期胃がんの患者さんに入院加療の提案をして、お話を伺っている時に、今は引退しているが若い頃は大工をしており、市民病院の第一期工事にかかわったのだと、懐かしそうにお話頂きました。このような方々に支えられ、この地域でこの病院は成長してこれたんだと、実感した瞬間でした。

さて、このたび鹿児島生協病院医報第17巻を発刊することができました。2013年の活動としては、学会発表が28件あり、4名が内科認定医を、1名が総合内科専門医を、12名がプライマリケア認定医を取得しています。

私たちの学術活動も多くの方々に支えられてできていること、またその成果を私たちの医療・介護機関を利用いただく方々のために還元していかなければならないことを肝に銘じつつ、これからも医療活動に邁進してまいりましょう。